

企画セッション:TB1

産学協働による教育関連 IT 技術の活用事例報告 2016

Annual Report for 2016 on Educational Technology Adoption by Industry–University Collaboration

企画部会: 教育技術開発部会
オーガナイザー: 常盤 祐司 (法政大学)
Yuji Tokiwa (Hosei University)

9:00 – 9:15 部会活動報告 常盤 祐司 (教育技術開発部会主査、法政大学)

新しいテクノロジーおよび標準を教育の場で利用するために、企業と大学が一丸となってそれらを用いた教育手法・技術を共同で開発し、利活用のあり方を提案することを目的として発足した本部会の活動を報告します。

9:15 –10:30 事例報告

(1) 青山学院大学における授業収録配信システムの導入と今後について

上之藪 和宏(青山学院大学)、重田 拓緒(メディアサイト株式会社)

青山学院大学附置情報メディアセンターでは2013年度より、「Mediasite」システムを活用し、LMSと連動した全学を対象に授業収録・動画配信のサービスを提供しています。その範囲は、授業収録にとどまらず、就職支援や職員研修、講演などに拡大しています。本発表では学生スタッフの協力を得て行っている授業収録および、「My Mediasite」によるノートPCを用いた収録方法による教育手法について報告します。また、2017年度に向け新システムの構築を行っており、その展望についても紹介します。

(2) 大学における電子計算機システムのクラウド化とBYOD化の取り組み ～東京農工大学の事例から～

三島 和宏(東京農工大学)、八巻 秀欣(ユニアデックス株式会社)

電子計算機の低コスト化と情報環境の変化は、大学における情報システムの在り方を大きく変化させました。大学における情報演習等に利用されるPC教室は、情報環境の変化と各種コストとの兼ね合いから、利用者による計算機端末持ち込み(BYOD)をベースとしたシステムとして変容するケースが増えています。東京農工大学においても、電子計算機システム更新に合わせ、PC教室の廃止とBYOD化を行いました。本発表では、これに至る取り組みの他、BYOD時代の大学における電子計算機システムの在り方について概説します。本学の新電子計算機システムは、いくつかの指針に基づき設計・構成されており、BYOD時代の電子計算機システムの新たな形を示しています。これら取り組みを通じて得られた知見等を本発表を通じて提供していきます。

(3) 産学連携によるドキュメントワークフロー改善の一考察

～富士ゼロックス授業支援ボックスとSONYデジタルペーパー～

喜多 一(京都大学)、中村 慎也、森田 雅夫、佐藤 悦志(富士ゼロックス株式会社)、
松浦 健(ソニーセミコンダクターソリューションズ株式会社)

紙の答案用紙は、利便性もある一方、「デジタル化に手間がかかる」「大量になると持ち歩きにくい、保管場所が必要」といった課題があります。これを富士ゼロックス製授業支援ボックスとSONY製デジタルペーパーを同時に利用することで、答案をスキャン、採点、LMSへ格納という一連のワークフローをすべてデジタル化し、作業効率を向上させました。しかし、授業支援ボックスの出力するPDFは、高圧縮技術によりファイルサイズが小さな反面、PDF内のデータ構造が複雑になることからデジタルペーパー上での描画が遅くなる問題が顕在化しました。従来、このような課題解決は、企業が独自で行ってきたために時間がかかることが多いが短期間で解決することを目標に京都大学と富士ゼロックス、SONYが協力し既存技術を活用しながら改善した活動を報告します。

発表資料: 大会終了後、本部会のWebサイト (<http://edtech.axies.jp/>) に掲載します。